

## 第二節 ふだんの生活

### 行商日記

初神の平木氏（明治十一年生、故人）は、筆の行商に精を出した人であった。大正二年から昭和二十九年に至る日記が残されている。許しを得たので、比較的くわしい大正十年分の「当用日記」を繰り、一年の姿を粗描してみよう。直接に筆の生産にはかかわらないが、農業を基においた筆の熊野の生活誌の一端が、よく窺われるようである。

この年の一月一日、朝は晴れていたが、次第に曇り、夜は小雨になった。「自宅に於て新年を迎ふ。一同無事に迎年す」という記事から日記ははじまっている。しかし正月らしい行事は何も記されていない。正月と盆は旧暦、氏神の祭りは新暦で行われていた。この年の旧正月は、二月八日にあたる。早朝から氏神社に参拝、戻ってお酒をのみ、雑煮をたべ、本家へ年始に行っている。一方、新正月も浸透しつつあったふうで、一月四日には新年宴会（会費一円四〇銭）が開かれた。翌五日には餅をついて報恩講を申し（お布施四〇銭）、本家の報恩講へも参っている。午後「池頼母子」に参列、掛米は二斗五升三合五勺であった。そして六日ごろから行商の準備にかかり、筆の小包を作って各地へ発送、海田駅から荷物も送り出して、十四日に雪をふんで中野駅から乗車、本年第一回の行商に出ている。

このたびは、一月十四日から二月六日までの二四日間、比較的短い。十五日の「おたんや」前に出発、旧正月の前に戻ったことになる。この人の場合は、尾道を起点にして備後一円を行商した。このたびの行程は、尾道―今津―福山―岩成―新市―金丸―府中―上下―市村―尾道である。得意先や新規の店に筆や墨をおろし、内金

や前回の売掛金を回収していく。日記によって概算すると、このたびの回収金は六〇〇円強であった(米相場は、二八円とある)。戻るとすぐに問屋等への支払いをすませ、本家などへ歳暮(酒一升、下駄)を贈っている。

戻って旧正月を祝ったことは前に書いたが、同じく旧正月三日には某家の「かんし」(親族縁者の新年の集い)に招かれ、同じく十二日に味噌をつき、左義長(とんど)を巻いて、十四日にそれをはやし、十六日には「お寄り」に参詣している。初お寄りである。こうして在宅中は、いわゆる年中行事を丹念にこなしていくとともに、農作業や山仕事にも余念がなかった。とりわけ二、三月には麦の手入れに精を出し、麦へ大豆粕に米糠をまぜたものを施したり、中打ち・溝かき・もとよせをした。他家の解体や新築の「こうろく」(労働奉仕)に出、ざぶとん講の初会(掛金九〇銭)にも出ている。たまたまこの年は記事を欠くが、例年四月二日には節句の餅をつき、三日にはご馳走を携えて山へ登る。

その間、行商のための準備も整えられて、四月五日から五月二十五日まで、五〇日にわたる第二回の商いに出る。この間の苗代づくりは比較的軽い作業なので、家族にまかせたのであろう。このたびはじめて長男を伴った。長男は一〇日ほど同行して帰宅しているが、この時の行程がほぼ標準といえるもので、尾道―今津―福山―岩成―新市―金丸―府中―木野山―上下―高蓋―小島―油木―呉ヶ峠―草木―東城―森―西城―庄原―三良坂―吉舎―甲山―宇都戸―市村―府中―新市―福山―今津―尾道というものであった。このたびの回収金は二千元に近い。戻ると早速に麦刈りが待っている。六月初旬に麦を刈り、本家と協力して田を鋤き、畦を塗り、石灰をまくなど田植への準備に余念がない。中・下旬にかけて本家や自分の田を植え、他家の田植えへ「こうろく」に行っている。(この年、六月二十五日には庄賀地で大田植えがあった)。七月三日が田休み(泥落し)。それから芋を植え、麦すり・とうすひき・田の草とり・粟まきなどと多忙をきわめる。田の草は、七月十日に一番草、八月四日に三番

草を取った。田へこしんもさしている。そして盆。旧盆の七月十五日は、八月十八日あたり、氏神社で盆踊りが行われた。踊りの順番は、一番城之堀・二番中溝・三番呉地・四番初神・五番出来・六番萩原であった(いいええると、前年には盆の十六日に、青年団が豊年踊りを実施している)。

盆には墓参の記事を欠くが、当然のこととして省略されたのであろう。そして九月十一日から第三回の行商に出、ほぼ第二回と同じコースを辿り、十月二十八日に帰宅した。戻った翌日が氏神祭の「夜ごろ」(前夜祭の日)で、三十日には境内で行われた大競馬会を見物している。十一月にはいととすぐに稲刈り・芋掘り・堆肥づくり・稲こぎ・田鋤きとつづき、二十日ごろからは麦まき・施肥と大童の日をすごす。十一月には頼母子講の記事

が目につき、三年掛講(掛米二斗八升二合)・平西池講会(掛米二斗四升)・昼講(掛金九六錢)等があった。なお、十二月十二日には、前年度に始まった毛筆品評会の第二回が実施され、これに参会している。

農繁期をさけて行商に出、正月と盆、それに村氏神の祭礼は必ず家で迎えるようにしている。当然といえば当然だが、農民の生活リズムに触れるようだ。一般の生活基盤は、やはり農業にあったわけである。次にそうした農耕の日々について、初神や萩原での聞き書きをもとに、ほぼ作業の行程にそってまとめておこう。

#### 田植え前の準備

もみかし——種もみは、前年注意深くよりわけて保存しておいたものを用いる。わざわざ



図2-2-1 中原明雄氏画・「もみかし」と「もみまき」の図

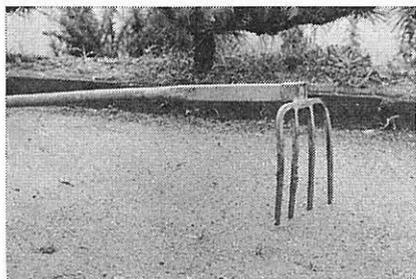


図2-2-2 のっばり(熊野町郷土館蔵)

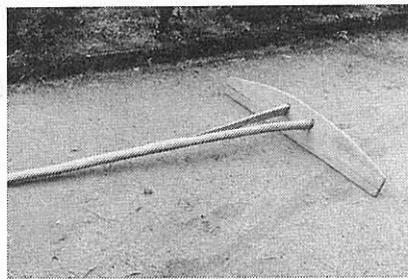


図2-2-3 えぶり(熊野町郷土館蔵)

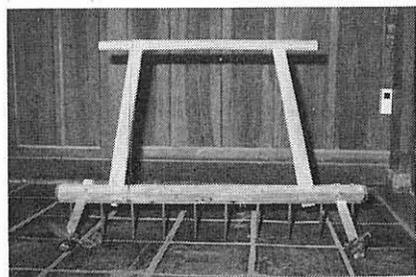


図2-2-4 すき(熊野町郷土館蔵)

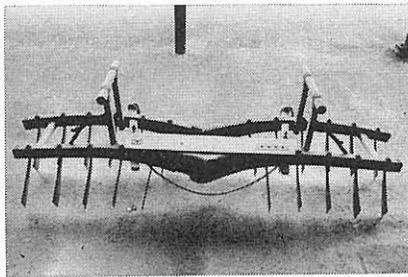


図2-2-5 ヒコーキまぐわ  
(熊野町郷土館蔵)

「せんば」を使うか、あるいは足踏み回転式の脱穀機をゆるく回転させて、種の芽がこわれないよう注意して得たもみである。それをいったん塩水にひたして選別したうえで、三坪か四坪くらいの小さい「たんぼ」という池、あるいはたらいに五、六日つける。もみながら十分水を吸うまでひたすのである。種もみは、反当たり四、五升は必要であった。

。苗代——苗代田を初神では「のうとこ(苗床)」というが、水がかりのよい田で、どこときまっていた。冬の間には鋤きおこしておき、三尺幅くらいの畝を作って整地し、水をあてて、種もみを厚く直播きにする。五月のはじめで、苗代の期間は、三〇日から五〇日の間であった。

。田ごしらえ——湿田のことを「だぶ田」という。「だぶ田」と乾田の間くらいは、旧年の十二月ごろに寒鋤きしておく、土が

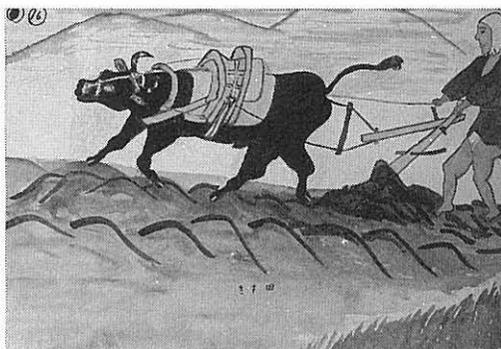


図2-2-6 中原明雄氏画・「田すき」の図  
牛にスキをひかせて、田の荒おこしをする。  
スキには浅く耕す「キツタテ」と、深く耕す  
ための「田スキ」とがある。「田スキ」には  
「ヘカ」がついている。

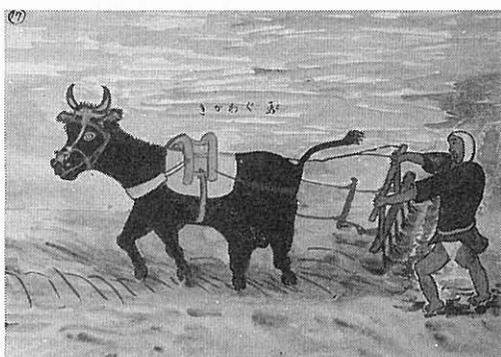


図2-2-7 中原明雄氏画・「馬ぐわかき」の  
図 牛にひかせて田をならす、代掻きに用い  
る。

風化してぐあいが悪い。「だぶ田」の場合、大部分は牛が使えないので、「のっばり鍬」といって四本の爪が直  
角に近い形に付いた鍬を用い、一鍬ずつおこしていく。こういう田以外は、たいてい二毛作である。これだと麦  
刈りのあと、六月のはじめごろ、田鋤きで鋤きおこす。まず「荒起こし」をし、「くれがえし」をして土を小さ  
く砕き、代肥えや堆肥などを鋤きこんで水を張る。油粕なども十分まき、「荒掻き」をしたうえで、土が水にな  
じむよう当分はおっておく。一方では「畦前」へ土を寄せ、水が洩らないよう畦を作り、代掻きをする。畦には  
一尺間隔くらいに穴をあけ、大豆を挿し、すくもで穴をふさぐ。そしていよいよ田植の当日、馬鍬を用いて最後  
の代掻きをし、えぶりで均らす。代掻きには歌があった。

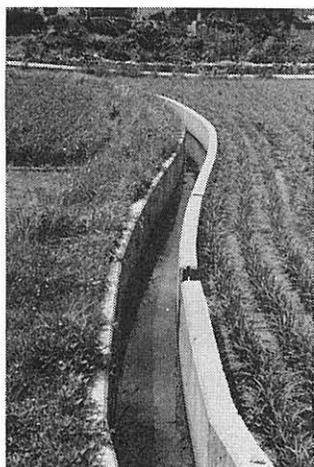


図 2-2-8 井 手  
(新宮地区)

。井手せき・溝さらい——田ごしらえにかかる前、四月のおわりから五月のはじめにかけて、随時に「井手頭」が「井手子」に声をかけ、井手の寄りをして、井手せきや溝さらいのことを決めた。作業がすむと田の畦でいっぱい飲む。「井手頭」には、井手に近い田を持つ家とか、反別の多い家の人がなった。

。番水——当地はあまり川に恵まれず、水量も豊かではなかったから、水の確保が問題であった。田へ水をあてるためには、(1)大川から水をひく井手がかり、(2)谷水をひく谷川がかり、(3)溜池による池がかり等の方法があった。新宮区海上側の例でいうと、(1)瀬野川の上流(熊野川)から水をひくために「海上井手」「ホンデ井手」「ウモト井手」があり、(2)の谷川によるものとしては、「稲荷井手」がある。(3)の溜池は、共同で使用する「平杉池」が最も大きく、他に個人持ちの池が若干ある。初神では、一つの井手で一町五、六反から二町くらいをうるおすという。田にはそれぞれ固有の水ブニ(水利権)があつて、田は水ブニもろともに売買されるのだが、旱天が

つづき水不足になると、水番をきめ、水ブニに応じて田へ水をあてた。番水という。水をあてる順番や時間が、厳重に定められるわけである。萩原では、番水のときは夜も寝ずに水番をしたときいた。ここでは、こうした番水にはずれた水、たとえば日没後三〇分の間といった番外の水を「オッタガワ」といい、「井手子」以外の人がその水をとつたが、その場合でもそれぞれの水ブニによって厳しく規

へ娘行かぬかやおいらの背戸にや、忍び桜の枝折りに  
へしめて寝ねされまだ夜は深い、明けりやお寺の鐘がなる

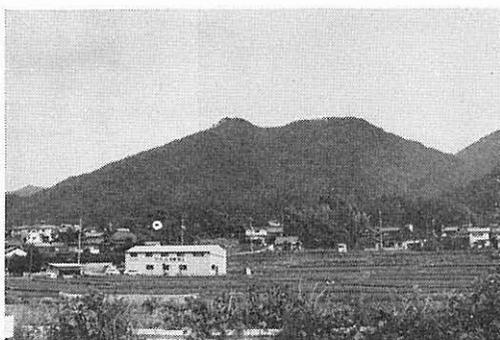


図 2-2-9 竜 王 山 (新宮地区)

制されていた。

。雨乞い——早天がつづく、雨乞いを行った。各地区に多い水神さんに祈願をするが、「バラ木」などを背負って山へ登り、いわゆる「千把火」をたく。登る山は大体きまっていて、東よりの地区(ニツ)は新宮の竜王山であり、呉地では天狗山、萩原では里地山であった。しかし、この経験はそれほど多くはなかったようで、この五、六十年で二、三回にすぎないという。

#### 田植え

。寄り合い植え——田植えでは、四、五軒から六、七軒が寄り合つて組を作り、「てまがえ」によつてお互いの田を植えた。本家と分家、それに近所などが組を作るのであるが、田の大きさに差がありすぎるとむずかしいので、だいたい似通つた面積をもつ者が寄り合う。したがつて大地主などは寄り合いにせず、早乙女を雇つた。苗代村あたりからくるものが多かった(萩原など)。各家々には、小さい田があちこちにある。そういう田は時を定めず家族で植え、まとまつた広さの田を寄り合い植えにするのである。前者を「早稲植え」とか「さびらき」といい、簡素な儀礼を伴うことが多いが、当地ではそうしたことばも儀礼もすべて早く失つてしまつたようだ。田の神「さんばい」とか、炊事にあたる「おなり」も同様である。早乙女も、田植えだからといって何を新調するということでもなく、天気の良い日には菅笠をかぶり、雨の日には「タコラ」「タコウラ」とも」というものをかぶつた。

。田植えの一日——この日は大体五回の食事をし、それによつて一日が区分された。食事は、早朝の朝めし・



図2-2-10 タコラとミノ  
(熊野町郷土館蔵)

こびる(十時ごろ)・ひるま(十二時)・お茶(四時ごろ)・晩めしである。萩原では、田植えをする家がこびるとお茶を用意する程度であったが、初神では、こびる以外に簡単な弁当を用意し、晩めしには御馳走をだした。といっても、田植鯖だとかちしゃもみといった田植えにつきものの食品は意識されていない。朝十時ごろまで苗取りをし、こびるを食べてから植えはじめると、取った苗が夕方までもち、ちょうどよかった。早乙女一人あたりが、一日四畝を植えると見込まれていた。すでに「綱植え」で、縦に芯綱をびんと張り、植え幅の目じるしになる珠をつけた横の綱をそれと直角に交叉させつつずらしていく。早乙女はこの綱にそって苗を挿すのである。時には、芯綱の縦の目を三筋くらいとぼして横の綱を張り、そうやっていったん植え終えてから、そこに出来た枡に早乙女が一人ずつ入って埋めていくということもした。初神ではこれを「枡植え」といった。「梓植え」も試みられたが、これは各戸で植えるのに適し、寄り合い植えにはふむきであった。

。田植歌——『熊野余滴』(昭和三十七年)  
をみると、

へ苗取り上手の苗をとる見やれ  
水もゆるがぬ苗をとる見やれ

という苗取歌がのっている。芸北の囃し田にも見られる歌詞であるが、こういう古い歌はきわめて少ない。音頭とりもないし、楽器で囃すこともなかった。歌好きの人が声を張りあげるくらいだとい、歌も

「ヤール五月ごりういがまた来たそうな、親の方よりまきがきた ションガエー

といった八七七五Vの近世調になっている。もとも萩原では、日が暮れてからの田植えを「夜田をたたく」といったそうだから、かつては太鼓を叩き、囃子を伴った仕事田もきつとあったにちがいない。事実、昭和の初年までは「大田植え」が行われていたという(第三節「年中行事」参照)。

。泥おとし——村の田植えがおわると、泥おとしの触れがあった。おはぎを作って、一日仕事を休む。

### 育稻・収穫

。田の草とり——つらい作業であった。女の仕事で、三番草から四番草までとった。二、三人つれだって、盆踊りの文句をうたいながらやる。昭和のはじめにはもう除草機があったが、最後の「とめぐさ」だけは、田をはいまわり、手でとらねばならなかった。八月の初旬ごろである。

。追肥え——てじん鯨を半分くらいに切って、株と株の間に刺したり、「トリ」(かずのこ)もこやしにして撒布したことがあった。

。害虫駆除——冬の間、田の岸(ゲシ)を丹念に焼き、虫の卵の駆除をはかっておくのであるが、それでも虫はつく。氏神さんからは、神札が配られた。榊森神社では、現在でも「榊森神社五穀成就之授田畠昆虫災悉退除所」とした御札を出している。実効があるものとしては、田に油を撒くことが多かった。節を抜いた竹筒に油を入れ、下方の小穴からしたたらせて、稲の根元など虫のついたところへかけるのである。この油は「ノートク油」といった(萩原など)。やがて誘蛾灯を用いるようにもなる。更にさかのほれば、「オークルバイ」の虫送り行事があった(第三節「年中行事」参照)。収穫前になると、稲穂につく雀を追う。子供の仕事とされ、一日中、田でバケツやカンを叩いたものであった。

。刈り入れ——榊山神社の祭りはいわゆる「おとぐんち」で、十月二十九日であるが、初神では秋祭りまでに

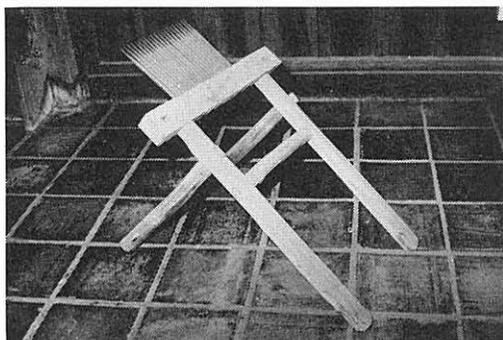


図2-2-11 センバ (熊野町郷土館蔵)

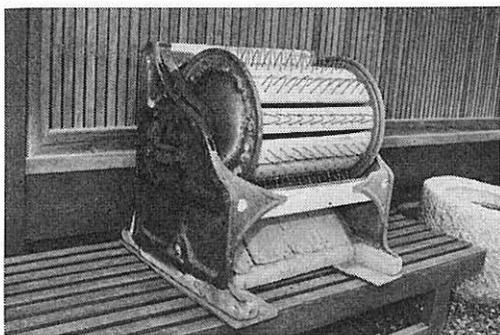


図2-2-12 足踏み式脱穀機 (熊野町郷土館蔵)

刈り入れるといい、萩原では祭りがすんでから刈ったという。祭りがすむと、時には霜がおりるようなこともあり、稲刈りはつらい作業になる。薄刃の鎌を使い、白黒のぶちが入った「トッサカ砥石」で鎌をときながら作業を進める。鋸鎌を使うようになったのは、だいぶ後のことである。とりわけ「だぶ田」の刈り入れはむずかしく、いろいろ工夫が必要であった。二つのめごをさかさにし、めごとめごの間に梯子をかけたわたして、その上に刈った稲をのせるとか、あるいは竹を組んだものの上に笹を敷いて、それに稲をのせ、引きずって田の外へ運ぶようなこともした。刈り取った稲は「はぜ」で干す。「はぜ」は一段で、「はぜ杭」三本を組んだものを両端に置き、長い「なる」を渡して、それに稲を掛ける。「はぜ二十日」ともいうが、割合長く干し、負い子で負うて、

三尺幅の牛道づたいに家まで運ぶ。

。脱穀——稲こぎは、家の中庭ですることが多かった。以前は「せんば」で扱いたが、大正の末から昭和にかけて、足踏み回転式の脱穀機を使うようになって能率が上がった。脱穀した籾は、「とうし」でチリをよりわけ、庭に敷いたむしろで干し、「靱さがし」で一日に三、四回かきまわす。そして「とうす」を二、三人でまわし「すくも」を分離

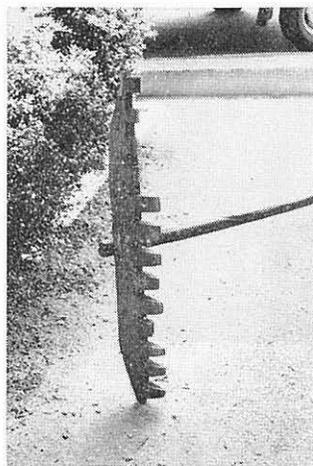


図2-2-13 籾さがし  
(熊野町郷土館蔵)



図2-2-15 せんごく  
(熊野町郷土館蔵)

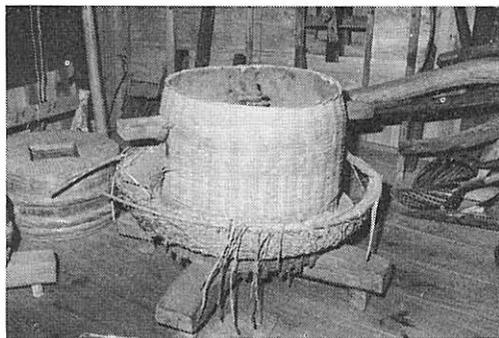


図2-2-14 斗 白 (熊野町郷土館蔵)

「とうす」は、「とうすたて」という職人がいて、地元で作ったという。  
。調整——「とうす」を挽いてできた玄米は、個人もちか又は組で作った「そうず」や、あるいは足踏み臼で精白する。臼つきは子守りをかねた子供の仕事で、一日にだいたい一〇〇〇から一五〇〇もつかねばならな

させて、「せんごく」などを使って完全な玄米にする。「とうす挽き」はつらい作業だったので、歌でやった。

「茶屋のあんどに梅屋と書いて、客は驚きてとまれ  
へ蝶よ花よと育てた娘、酒にかえます水酒に

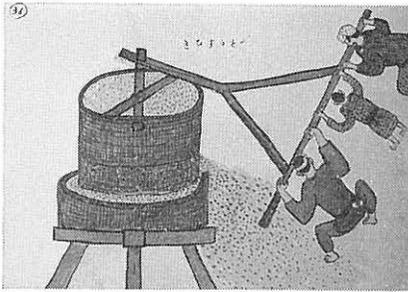


図2-2-17 中原明雄氏画・「とうすひき」



図2-2-16 中原明雄氏画・「稲こぎ」の図「せんば」で稲をこぎ、手桶で「しょうれんばかご」(胴丸かご)に移している。「せんば」の下に、「もくさで」「まぐさとうし」が書きそえられている。

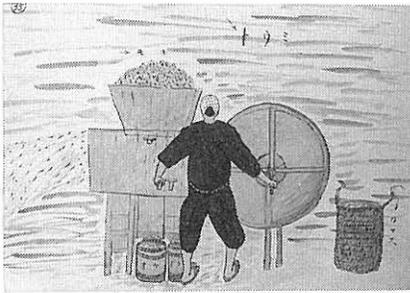


図2-2-18 中原明雄氏画・「とうみ」で榎のチリをとる。

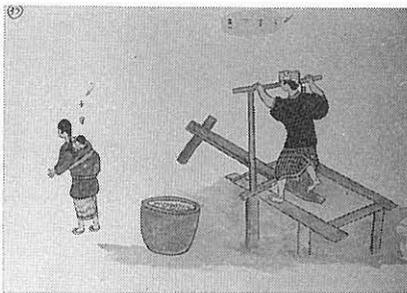


図2-2-19 中原明雄氏画・「うすつき」の図 足踏み式の唐臼で精白する。左にいるのは子守り

った。なお脱穀後の藁は、牛馬の飼い葉にするとか、屋根葺きの材料にするため、納屋の「つち」(牛小屋の上)へ積み上げておくことが多い。

### 麦作

。麦まき——「だぶ田」以外の乾田では、ほとんど麦を作った。人間が食用とする裸麦が主で、牛馬の飼料とする大麦がつぎ、小麦はごくわずかであった。自作農家も作ったが、預り百姓の場合は麦には年貢がなかったので、ずいぶん力を入れたものだという。稲を刈ったあと、「かぶきり」という小ぶりの鎌で一つ一つ稲株の根を切りおこし、牛で鋤いてから溝を

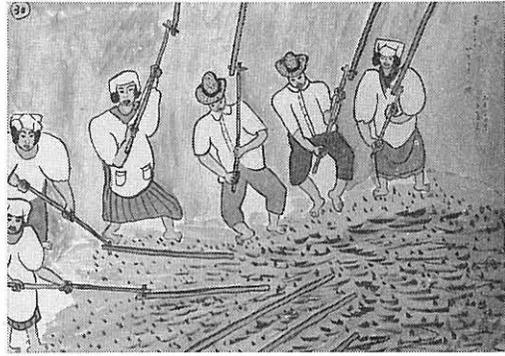


図2-2-20 中原明雄氏画・「麦こなし」の図  
「ブリでたく綾」「5月20日より6月7日  
まで」と、画中の説明にある。

三、四月になると、最後に「もとよせ」をする。「がんぎ」の間の土を麦の根元に寄せかけるのである。草をおさえる効果があった。

。収 穫——六月になって刈りはじめる。「せんば」で麦の穂首を落とし、乾かして、「ぶり」で四方から叩いてまわる。麦打ち唄がある。

へうたいなされやおうたいなされ、歌で器量がさがりやせぬ ショガエー

へうたい声すりや殿御さんと思うて、いらぬ水まで汲みに出た ショガエー

そして「とうみ」にかけ、「そうず」や足踏み臼で精白する。裸麦はローラにかけて押し麦にし、家々で違う

あげ、畝を作る。「飛行機まぐわ」が出来てからはそれをひいて均らし、「がんぎ」を切って麦をまく。まいたあとで溝の土をかぶせ、代肥えをのせる。「がんぎ」と「がんぎ」の間には「どうず」（下肥え）をかける。十一月から十二月にかけてのことである。「どうず」にする下肥えは不足がちで、入浴後の風呂水などはみんな大壺にためこんだ。初神の人の話では、呉まで下肥えをとりに行ったそうである。一軒一軒にそれぞれ約束の家があつて、そこまで牛にひかせた四輪車で行く。ふつうの馬車よりいくぶん小さい車であつた。

。手入れ——麦が分結した霜のころ、麦踏みをする。麦踏みのかわりに土入れをすることも、両者を併用することもあつた。

が、だいたい七・三か五・五の割合で米にまぜて食べた。大麦は牛馬の飼葉として欠かせず、平釜で薬といっしょに煮、飼葉桶で糠とまぜあわせて飼料とした。

なお、畑では粟・キビ・大豆・小豆なども作ったが、自家用程度で、売りに出すほどのものではなかった。

### 第三節 晴れの日々——年中行事

前節でみたように、本稿で扱う範囲では、旧暦が生きていた時期があるのだが、以下原則として新暦に統一してまとめておく。

#### 正月の行事

。煤払い——年末の適当な日を選んで大掃除をする。正月の準備の開始日については、もう生きたしきたりや言伝えは残っていない。真宗地域なので、神棚を祀らない家が多く、注連縄の張りかえなどは限られた範囲で行われるにすぎなかった。

。餅つき——十二月二十七・八日と三十日が餅つきの日である。二十九日は、「苦」を残すといって忌み、三十一日は繁忙のために避ける。一日で何斗というほどたくさん餅をついた。粟やきびを入れたものもつくが、全体の二割から三割の程度であった。出来あがった餅を「もろぶた」へ並べる。

。こつもごり・おおつもごり——十二月三十一日を「おおつもごり」、その前日を「こつもごり」という。まづ正月の買物をした。鮭は必ず買う。そして節料理を作る。煮しめといって、昆布・ごぼう・こんにゃく・里芋・人参・高野豆腐などを醤油で味付けしたものと、煮豆・かずのこなどをたくさん作り、重箱に詰めたり、大皿に並べて、正月三が日は料理をしないですむようにした。なお「おおつもごり」は、一年後半期の買い物代